文部時報

昭和五十五年一月
第一二三二号

特集■これからの教育

▽新春対談
我が国の将来と教育・文化……4
谷垣　専一・山崎　正和

これからの教育……高村　象平　20

学校教育と生涯教育……飯島　宗一　30
――あたらしい教育観の基盤的状況――

教育の国際的動向……天野　郁夫　41

我が国教育の展望　課題の指摘と提言……47
天城　勲・新井　郁男・石井公一郎・伊藤　善市・
茅　陽一・香山　健一・日下　公人・柴田　鉄治・
滝田あゆち・田中　澄江・ヨゼフ・ピタウ・森　隆夫

課題の指摘と提言を読んで……麻生　誠　63

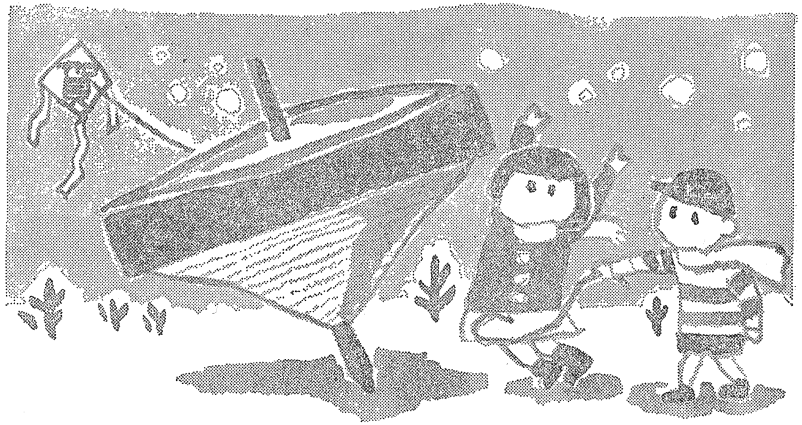
●海外教育ニュース……74
教育省の設置決まる（アメリカ合衆国）

●文部省のまど
大学設置審議会「高等教育の計画的整備について」を報告……大学局高等教育計画課　77
文教施策連絡協議会終わる……大臣官房企画室　93

●外国だより……鈴木彬司　71

●昭和五十五年表紙絵入選者発表……95
文化財●箱木家住宅（宮沢智士）
絵　画●梅原龍三郎　黄金の首飾り（岩崎吉一）

表紙　赤羽根秀一
カット　内部　敬生



新春対談　我が国の将来と教育・文化

文部大臣　谷垣専一氏

世界に誇れる教育の普及

山崎　このたびは文部大臣御就任おめでとうございます。

大臣　これは恐縮でございます。

山崎　新年のお話しということですので、日本の教育の良さということから始めたいと思います。

私の数少ない経験ですけれども、外国に行きまして日本を振り返ってみますと、日本の教育、特に初等中等教育の充実は本当に素晴らしいものだと改めて思います。

例えばヨーロッパですと地方の町や村で一番立派な建物は教会ですけれど、日本ですと必ず学校ですね。

大臣　確かにそうですね。私、若いころに現在の中国の東北部といわれている所に住んでいたことがあります。あそこには日本人の開拓者がずいぶん住んでおりました。それに第一次世界大戦の影響もありまして、白系ロシア人もおりました。白系ロシア人の開拓地に行きますと、非常に貧しいところにも教会がありまして、しかもそれがその地区の中心になっていました。ところが、日本人の開拓地へ行きますとまず学校ですね。

山崎　そうですか。実は、私は満州育ちでして、奉天で終戦を迎えました。戦後、ご承知のような混乱の中で中学の最初の学年を始めました。当時はソ連軍の占領下で、発疹チフスが流行するやら、あちこちで暴動が起こるやら、食糧もありませんし、学校の建物などは木材の部分を全部はがして燃料に使うという状態でした。冬になりますと零下二十度を超しますが、その中で日本人の親は子どもを学校にやりましたね。

私、いまでも覚えておりますけれど、綿入れの布団のようなものを着せられ、手には野球のミットのような手袋をはめまして、画板と三脚を持って学校へ行きました。学校には机もありませんし、もちろん窓にはガラスも入っておりません。そういうところで、先生方は一日も休まずに私たちを教えてくださいました。行き帰りが非常に危険なのですが、それでも日本人の親は子どもに集団をつくらせて学校に通わせました。

大阪大学教授　山崎正和氏

大臣　そうですか。私はそのお話しは初めて聞きますが、偉いものですね。

山崎　当時、教材はないし教科書もろくにないのですけれど、私はいまにして思えば、何か日本人の教育の原点というものに触れたように思いますね。

大臣　日常のその苦しい条件の中で、日本人はそういうところに将来の夢を持ったのでしょうね。しかもその夢の持ち方が切実ですものね。

山崎　国が滅びたのだということを、当時満州におりますと、日本の方よりもっと切実に感じました。政府もないし法もない状態の中で、もちろん親たちは職も明日の食べ物もないわけですが、その時に真っ先に考えたことが自分たちの経験と知恵を後代に伝えること、つまり教育だったというのは日本人の不思議さではないかと思いますね。

大臣　そうですね。

山崎　これには、さすがに現地の中国人も、占領しているロシア人も驚いたようです。

大臣　それはそうでしょう。

山崎　日本人は相当古くから、広い意味の読み・書き・ソロバンの教育、それから最低限度の市民道徳を教えるということを行っておりますね。

大臣　その意味では、徳川三百年の時代がそういう内面の充実を目指しているんですね。

山崎　諸外国でも教育はずい分古くから行っておりますけれど、それはエリート教育ですね。日本の場合は、かなり早くから大衆教育を行っておりますね。室町時代から往来物といって手紙の書き方の本があって、それが農民の間にも広まっていたようですね。

大臣　日本人の一つの民族性なのか、長い間の鍛練というか、歴史の中でそういうものが培われてきたわけですね。それが明治の時代になって、近代的な小学校制度となり、そして戦後六・三制になった。

現在、高等学校への進学率が九四パーセントに、大学・短期大学への進学率が三八パーセント近くにまで到達しております。これは、いまお話しにありました日本民族の教育の原点からくるものなのでしょうね。エリート教育という立場からはいろいろ議論がありましょうが、これだけの体制を持った国はないのではないかと私は思いますね。

山崎　おそらく、大学がここまで大衆化しているのは、ほかにはアメリカと韓国くらいではないですか。

戦後の大学制度は、駅弁大学などと悪くいわれもしましたけれど、大筋において間違っていなかったような気がいたします。

大臣　私も、文部大臣に就任したからいうわけではありませんが、これだけ豊かな教育の機会があり、また充実した設備を用意し、国民の二五パーセントが何らかの意味で教育機関に学んでいる、こういう状況は他に例が少ないのではないかと思っています。

山崎　例えば、日本では国民がだれでも新聞の一面記事を読んで、世界がどうなっているかが分かるのですね。こういうことは当たり前のような気がしますけれども、諸外国ではなかなかこうはいかないと思います。

大臣　おっしゃるとおりです。一般的に教育の機会が多くて、水準が高くなっておりますが、それはマス・メディアが発達したからだという説もありますが、それだけではありませんね。

山崎　マス・メディアを読めるような素地があるわけですね。

教育の質を考える

大臣　そういうことです。確かにその意味では、皮肉に見る人もありますけれど、私は、これは日本の教育の大きな成果だと思いますね。

しかし、この次には質の問題が当然でてくると思いますね。私は、文部大臣に就任する前からいっていたのですが、教育がマス・プロダクションになってしまった、これをどう評価するか、そこの段階で止まっていてはいけないということです。教育の普及という事実を踏まえて、それではこれを今後どういうふうにいいものにしていくか、ということを考えていかなければならない。

山崎　いわゆる教育の質を批判する人々の意見を聞いていますと、いまから半世紀前ならば大学に行っていなかったような人たちが、いま大学に殺到しているという事実を忘れている場合が多いですね。量の全体が増えているということを無視して、その端々を取り上げて欠点を指摘するというのは挙げ足取りのような気がします。しかも、日本人にとって教育というものは、単に諸外国で考えるような技術を身につけるとか、あるいは出世の手段にするというようなものとは少し違いまして、もう少し大きな意味があるのではないかと思います。

よくいわれることなのですが、日本は昔から平等な国でして、特に現代では、相続税の制度などをみましても、平等化の方向に進んでいます。こういう制度の下では、お金を貯めるとか、大きな家屋敷を残すということはあまり意味をなさない社会です。そうしますと、人間は生まれて一生の間に何か積み上げるという楽しみを味わおうとすれば、それは教育とか教養以外にないわけですね。ですから、面白いことに、娯楽の分野でも教育的な性格が非常に強く、お茶ですとか、お華ですとか、音楽などの習い

ごとが非常に盛んですね。国民が、習いごとを娯楽にしているという国は世界中にそうはありません。今、国民が短期大学にせよ、大学にせよ、そこへ行きたいという気持ちには、心の豊かさを求める気持ちがあるわけです。

大臣　確かにそうですね。特に戦後急速にそういう状態になったわけです。これには、六・三制が良かったという議論があろうかと思いますが、反面、いまの大学生の諸君を見ておりますと、学問というもの、それから自分に与えられた若い時の青春という非常に大切な時間というものの尊さ、もっと端的にいうと、学問に対する熱情というものの観念が希薄になってきているような気がします。まあ、大衆化しているわけですから、多少割り引いて考えなければならないのですけれど、教える先生方の質の問題もありますが、教えを受ける方の学生の強烈な意欲というものも弱いものになってしまっているのではないかと思いますね。

山崎　近ごろの学生は、少しおくてになってきておりますね。これはなぜなのか。世の中全体が豊かで、いうところの過保護のせいであるのか、あるいはいまの学校制度が、高等学校の時からある意味で平均化、平等化を目指して行われているせいであるのか。大学を卒業する四年生になってやっと勉強が面白くなるという学生がかなりいますが、その時ではもう遅くて、就職してしまいます。

特に、人文科学系の学部ですと、その学問がどういうものであるかということが分かるまでに相当時間がかかります。自然科学の場合でも基礎的なところは同じです。工学部とか医学部なら何を習うかということは、入る前から分かっていますし、社会科学系統でもかなり分かっていますね。しかし、人文科学系の学部ですと、学科の名前を聞いてもそれが

何であるのかがよく分からない。何となくという気持ちで来ている学生がやはり多いですね。そうしますと、いわば四年間の教育がやっと終わったころに興味がでてくるという、非常に皮肉なことがまま起こります。そこで、またこれが循環になるのですが、大学院に行きたいという学生が非常に増えています。この点が将来なかなか難しい問題だと思いますけれど、就職してからまた学校にもどれるような、そういう制度を考えていかなければならないのではないでしょうか。

能力伸長の時期と自発性の尊重

大臣　いや、私はそういうところを疑問にしていたのです。私は、人間はいつまでも成長するのではなくて、子どもの成長の過程では、能力の伸びる大切な時期があるのではないかと思いますね。その時期を失ってしまったら、教育の効率もずい分落ちるのではないかという考え方を前から持っていました。いま、山崎先生のお話しの中で感銘を深くしているのは、おくてになったということをいわれたことです。旧制の高等学校の生徒たちというのは非常に恵まれた人たちでした。昔のように世の中全体が早く成熟する中で、一種の猶予期間をもらったエリートたちというのは、非常に意欲的になるのは当然のことですね。ところが、生活の在り方も、以前のように生きることに一生懸命になるという状況でなしに、ゆとりが生じてきておりますね。生活水準も上がっております。そういうことになってくると、

なるほど、いまの人が自然におくてになるというような社会的な現象があるのかも知れませんね。

山崎　万事、心身ともに遅れてきているのではないかという気がいたします。それはそれで必ずしも悪いとはいい切れないでしょうが。

大臣　私、そのあたりにまだ問題があると思っておりますのは、確かに成熟の度合いが自然に延びてくるということは十分あり得ると思いますが、人間が成長していく中で大切な時期というものは、若干遅れたとしても、やはりあるだろうと思います。それに現在の学校教育の制度が適合をしていくようになっているか。そういう質的な問題に対しての適合というのはどういうことなのであろうか。これは、教育をする方、与える方の立場、それからもう一つは、勉強しようとする学生諸君の意欲の問題。それをどういうふうにうまく適合させることができるのかということです。

山崎　その意味で、文部省が始められた新しい高等学校の学習指導要領は、一つの進歩だと思います。つまり、いわゆる強制的に勉強する部分を比較的小さくして、自由な選択の部分を増やす。この自由な選択を増やす部分を、現場がうまく受け止めてくれて、かなり早くから大学へ行って習うようなことを教えてくれたり、あるいは社会にでてから学ぶような、職業訓練につながるようなことも教えてくれれば、もう少し意欲を持って大学に入って来る人もでてくるように思います。これまでのところは、あまりにも「義務」教育がうまくでき過ぎており、それが高等学校につながり、全部が同じレールの上を走るんですね。この全部が同じでなければならないという理念は、機会均等という点ではよいと思うんですが、本人の自発性というか、選択の余地を奪うという点では若干問題があったと思います。

　それから、高等学校での習熟度によるクラス編制は非常に結構なことだと思います。それができてきますと、大学の状況もやや変わってくるんではないかと思います。

大臣　確かに、学校教育の設備が向上し、学校も増え、また先生方もそれに対応するだけのものがあるということは非常に大切なことですが、次の段階をだんだん考えていかなければいけない。いわゆる質の問題です。このことに、皆が気がつき始めて、いまお話しのありました学習の習熟度に応じた教育を行うということも進めようとしているわけです。

山崎　実際にはいろいろと難しいことですが、しかし考えてみますと楽しい夢もあります。一例を申しますと、ずい分長いこと日本の学校の中で教える芸術というのは、音楽と美術に限られていたわけです。それが今度の指導要領によりますと、場合によっては演劇を教えてもよいと書いてあります。私ども演劇に携わっている者として大変心強いことですが、それを教える先生をどこで養成するか、そこまでは文部省の方はまだお考えいただいてないようですね。

大臣　その問題が大きいですね。

山崎　かねがね、入学試験のことでもいろいろ議論がありましたが、これも昨年から例の共通一次試験が始まりまして、二次試験の取り扱いはいまのところ大学によってバラバラですけれども、例えば私が奉職しております大阪大学の文学部では、昨年の二次試験ではかなり意欲的な問題を出しました。作文を重視して、例えば物を観察してそれを文章に直す能力を問うというような、従来の国語教育の中では、比較的なおざりにされていた部分を昨年の入学試験で取り上げたのです。まだ将来を占うには早いのですが、こういう方向に進んでいきますと、高等学校教育の多様化ということも、それにつれて進むのではないかと思っております。

大臣　そうですね。共通一次試験がどう定着し、あるいは改良されていきますか、これからのことですから、私たちも非常に期待しています。

生涯教育の要請とその対応

山崎　教育には根本的なジレンマがありますね。教育には本人の自発性を尊重しなければならないという面と、平等でなければならないという面があって、その間には永遠の矛盾があるわけですね。その兼ね合いが文部行政の永遠の課題だろうと思いますね。私は、それを一面において補うものが、例えば生涯教育の一つの機能であると思います。

　日本の教育は、底辺を上げることについては非常な成果を収めました。しかし、指導者をつくり、トップを引き上げることについてはまだまだ余地がある。特に国際人をつくる面で遅れています。その点

で私は、一つの試みとして、生涯教育の一部をそういう面に振り向けてはどうであろうかという気がするのです。例えば学校を出て就職した人が、更に企業で働き、あるいは自分自身を磨くために高度な教育を受けたい、と後で思うわけですね。それを大学院へもどしていく。それも、できれば働きながら授業が受けられるような制度をつくるのは、これは不可能なことではないと思います。

特に国際化ということに関連して、比較文化とか、国際政治とか、高度な語学・会話能力など、一見社会教育のように見えますけれども、学校教育と社会教育のいわば結合のような場を、今後は考えていってよいのではないかと思います。

大臣　なるほど、私は生涯教育という場合、国民の各層の要請にこたえるものという意味で、教養、趣味などが主となるのではないかと受け取っていました。しかし、いまおっしゃったように、大学院の学生にして聴講させるような、そういう分野も考えられますね。

山崎　生涯教育には、一つはご指摘の趣味、教養の面があって、いわば家庭婦人あるいは老後の人たちの生きがいにかかわるようなものがあります。

もう一つは、学校教育におけるドロップ・アウトをどうするかということです。これはヨーロッパなどでは大きな課題となっております。しかし、日本ではドロップ・アウト問題は、さほど深刻ではない。そこで、日本ではそのどちらでもない、第三の生涯教育を考えるべきでしょう。つまり、頂点を引き上げるということに生涯教育の一部を向けられるのではないかと考えております。

大臣　その必要性があるのは技術のような自然科学の分野もそうでしょうが、歴史とか経済とかという社会科学的な分野でもいえることでしょう。

山崎　技術の分野でも、もう一度発想を変えてみようとか、基礎から考え直そうということになりますと、そういう指導に当たる人たちが、もう一度理工系の大学にもどってくることは、きっと役に立つと思います。ですから、やはり基礎的な理工系、それ以外は国際社会で競争していけるような人材を育てることだと思います。

大臣　その分野では、優秀な諸君はそういう余裕を持たないまま消耗してしまう可能性がありますね。蓄積する余地や、自分の能力を高める機会を持たないといけませんね。

山崎　最近は、例えば新しい業務の開発とか、事業の企画や、企業全体が社会にどう対応していくかという広報の仕事に携わる人たちは、やはり勉強しなければなりませんし、勉強しようとしておりますね。

ですから、そういう方面で働こうとする中堅、あるいは中堅より少し若い人たちを、企業などでは外へ派遣する意欲を十分持っていると思います。問題は大学側との接点だと思います。

大臣　そういうものにこたえ得るだけの研究なり教育なりの機会を用意するということは新しい観点ですね。

山崎　日本の教育、社会教育を含めてですけれども、日本人の国際化ということが今後大きな課題になると思います。そのための対策の一つとして、独自の大学院大学を考えていく時期にきていると思います。

大臣　いままでの構想にはないものですね。

山崎　この構想を語るのは時期尚早かもしれませんけれども、実は総理の政策研究会の中に、環太平洋連帯グループというのがありまして、その中で社会、文化の問題を考えている人々の間では、このことがしばしば話題になっております。

文化の時代、地方の時代への対応

大臣　いま、国際化社会の問題になっておりますが、ほかに田園都市国家構想、文化の時代、地方の時代という考え方がありますね。文部省の立場からいいますと、そういうものに対してどのように接近していくかという問題がこれからの大きな課題です。

具体的にいいますと、地方で文化活動のできる施設、拠点をつくる。これは結論的に直ぐ思いつきます。とにかく、田園都市という考え方は非常に魅力的なのですが、地方の文化の振興という問題も、現在の状況からみまして、住民が切実に望んでいるのだと思うのです。しかし、それを文部行政の立場あるいは文化政策の立場から、どういう性格づけをして、長期的視野をもってやっていくのか。それに対する具体的な接近の方法はどうなのか。こういう問

題はまだ試みの議論が多くて、地方の要望と全体との調整がとれていない感じがするわけです。しかし、この問題は、文教政策全体の問題としての立場から、ある程度まとまった構想の中で整理をし、推進していく必要があると考えています。

山崎　難しい問題ですから、そうそう簡単に答えが出るわけではないのですが、考え方の手掛りというべきものを、前期の中央教育審議会の答申「地域社会と文化について」で申し上げました。もちろん、文化活動は国民の自発性に待つものであって、国の方からあれをしろ、これをしろ、というのは確かにおかしなことになると思います。ただ、いま国民の意欲は、社会教育と文化活動の接点のあたりでは非常に旺盛なものがあります。

それでは国は何をするかということですが、一つは、やはり施設の充実ということが浮かんでまいりますが、施設だけではうまくいきません。そこで私どもが前回の答申で特に申し上げたことは、文化活動に関する情報を人々に流していくような中央組織です。そういうものが、例えば地方で講演会をやりたいという場合に、どこそこに、こういう講師がいる。東京まで講師を捜しに来なくても、地元にこういう講師がいるではないですか。あるいは芝居を観たいというところがあれば、こういう劇団が、いまこういうふうに回っているから、それに便乗したら安く観られますよ、というような情報を提供できる仕組みです。

それから、もう一つ大事なことは、文化活動の指導をしたりしている人たちに、新たな再教育の場所を提供してあげることです。

文化に関する情報の提供

大臣　山崎先生のおっしゃることは、よく分かります。それで、今度は地方の立場からみてみると、仮に京都市のような大きな都市ではなく、もっと手軽に何んでもやれるような、人口が十万、二十万あるいはもっと小規模の五、六万の市長になったつもりで考えてみますと、住民の文化活動に対するニードに対してどうこたえるかが問題です。

公民館を造ったらいいということぐらいは気がつくんです。しかし、文化というものは創造されるものでしょうし、人間が必要ですね。こういうことについて相談相手になってくれるところがなかなかないわけですよ。実際に行動する者からみますと、そこのところが非常に欲しいわけですね。

それから、私たち、大阪に行くときに、大山崎のところに来ますと、特徴のある古い建物が見えてくるとか、京都へ行けば、駅のそばに古い塔が見えてきます。そうすると、ああ、大山崎だな、京都だなと思いますね。ですから、少なくとも文化活動という場合に、建物自体、あるいは建物を含めた周辺の環境自体が、一つの特徴を持たなければなりません。そういうことに関して相談をしに行くところがないのです。文化センターなり、公民館なり、いろいろな施設を造ろうとした場合に、建物そのものが文化に対する影響があるわけですから、そういうものについての相談相手になってくれるような組織が必要だというのが私の意見です。そういう必要に迫られた地方の小さな自治体の人たちから、どうでしょうかとよく相談を受けるのですが、適切にこたえることが難しい。

山崎　文化施設というのは郷土愛のシンボルでして、非常に面白い例がオーストラリアのシドニーにあります。昔からシドニーというのは、何となく特徴のない町で、思い浮かべようとしてもピンとこなかったわけです。ところが、港の入口のところに非常に美しいオペラハウスが出来ました。これは中味もさることながら、建物が国際コンペで出来た非常にみごとなものでして、ちょうど帆立貝をいくつか重ねたような、あるいは船が帆を上げているような真っ白な建物なんです。いまでは、だれでもシドニーというと、あの建物を思い浮かべまして、それが町全体のシンボルになるわけですね。当然そこに住んでいる人たちの愛情もわき、自分の町だというと先ず思い浮かべるものとなる。顔ですね。ですから、私はこのようなものが、これからの町に必要だろうと思います。それが町の人たちの吸引力になるのではないでしょうか。

そこで、ご指摘のとおり、そういうことをやりたいと思ったとき、それでは、それにはいろいろな方法がありますよ、いわゆるコンペということでおやりになってもいいし、あるいは指名コンペというやり方もありますし、指名するのならここにこれこれという建築家がおりますよと、そういう情報全部をセットしまして、必要に応じて相談にのるというような中央組織が欲しいですね。

大臣　本当にそういうものがあると助かります。

山崎　窓口になる人たちが、必ずしも全部のことを知っていなくても、だれに相談したらよいかがそこで分かればよいわけです。更に、よい企画が持ち込まれたときには、補助金の交付についても考えてあげられるような文化行政の相談窓口というのが、一番欲しいですね。

大臣　優れた演劇であろうと何であろうと、どこかそこへ連絡すればそういう方々が来てくれるという仕組み、そういうものが必要ですね。

山崎　そういうものを作っていただきますと、文化というものに対する考え方も変わってまいります。中央の方でそういう組織でも出来ますと、教育委員会などの担当者が、いまよりももっとしばしば中央に接触ができ、研修もできましょうし、ずい分力強いと思いますね。

文化への接近を容易に

大臣　私、よく青年会議所その他の地方の人々と話すのですが、君たちはなぜ地方に落ち着く決心をしたのか聞いてみますと、それは家業があるから落ち着かざるを得ないという人が多いのですけれど、しかし、都会の生活を経験している人も多いのですね。その経験を通して、地方の生活の良さを見直すということがあるようです。例えば東京には文化がある。けれど東京では実際の自分の住居と文化に触れられる所とが非常に離れている。地方であれば、水準は低いかも知れませんが、手近にあるというわけですね。三十分も行けばそこにある。確かに自分はそのコミュニティの中に入っているという感じがあるのですが、東京には何年間も住んでおりましたけれど、確かにオペラを観に行く、勉強をしに図書館

に行ったり、あるいは講義を聞いたりすることは可能だったけれども、それはおよそ遠いところへ行く努力をしなければならない。

ですから東京住まいの諸君が京都に行きますと、落ち着くというのですね。一体何が落ち着くのかといいますと、京都大学近くの、あの付近に住んでいる学生諸君の生活と東京の学生諸君の生活との間には、雲泥の差があるからだというわけです。その差は何かといいましたら、さきほどの住居と文化との距離の遠近なのですね。大都会では、文化が遠いんですね。地方の諸君は東京の文化を願望しているのですが、しかし、それは東京へ行ってもないというのですね。

山崎　私どももよく聞くことですが、東京の劇団の公演は、東京の人よりも地方の人の方がよく観ているのです。というのは、地方の町で年間四つとか五つとか演劇が上演されますと、学校の先生などでは好きであれば、ほとんど全部を観ているのです。ところが、東京では好きでも四つもはとても観られません。皮肉なことですけれど、うまく巡回させていきますと、むしろ、地方の方が東京よりも文化に肌で触れられる機会に恵まれていますね。それとも

う一つ、これは大臣もよくご存じのことと存じますが、地方の青年会議所の人たちなどは、この町だと自分たちで何かが出来る。自分が何かやっているという実感があって、これがまた生きがいになっているようですね。東京では広すぎるし、上が偉すぎますしね……。

大臣　生活が平準化してきた結果、東京の文化というか、質の高い文化を地方でも求めるようになっているのです。いま文部省では一生懸命、公民館や文化会館など地方の施設の助成を進めており、だんだん良いものが出来てきますね。それを地方の人々の全体としてのニーズに合うようにしていくことが出来れば、もっと効果があると思います。

山崎　最近、特定の地域の住民を対象としたいわゆるタウン情報誌が、全国で四百種類出ているそうですけれど、その中味を一、二見ましたところ、面白いことに昔のものは地域運動といいますか、とかくある種の政治運動に結びつくものが多かったのですが、最近はそれが全くありませんね。

そのかわり何が出てくるかというと、広い意味での文化要求、何も高級な芸術ばかりではありませんけれども、ともかく何か都会的な情報に触れたい、

ファッションも含めてですね。そういうものに触れたいという欲求が非常に強くでています。むしろ、そればかりという感じです。差し当たって、やはり若い人が中心ですから、地域の伝統もさることながら、東京の文化あるいは現在の世界の文化に憧れるので、やはり私はそれから満たしてあげるべきだと思うのです。

もちろん地域の伝統というものは決して死ぬものではありませんし、やがてまたそれは定着してきますから、差し当たっては、かつての日本の教育が国際的な水準を地方にまで広げたように、普遍的な文化的情報を広げていかなければいけないと思います。

私が学生時代に倉敷へ行きますと、コーヒーが飲めなかったんですね。うどん屋にコーヒーがあるような時代でした。ところが、いまや倉敷はコーヒーの町になってしまった。最近、私が手伝っている財団で「地域文化賞」というものを出しましたが、その受賞者をみても、地域文化の国際性は非常に強まっています。

あとは、就職の問題などがありますけれど、産業そのものも第三次産業が伸びる時代ですし、文化の充実というのは文教行政上だけの問題ではなく、それを超えた国策だといってもよいのではないでしょうか。

大臣　国民の活動の中にも、そういう方向に向かうような動きがありますよ。従前とってきた経済政策の結果、我が国の経済は高度の成長をとげまして、都市への人口の流入は極めて大きいものがありました。都市化現象といわれているものですが、都市に流入した人々はそこに定着するようになるため、将来、都市人口は全人口の七割くらいになるという見方もあるようですね。こういう人口が集中している都市の問題を考えるときは、都市という一律的ないい方だけで片づけるのではなく、深く都市の機能なりをよく分析していく必要があると思います。特に、みんなが東京や大阪に住んで、そこの人口が千二百万も千三百万にもなってしまっては、必ずしも良好な居住環境とはいえないと思います。やはり、暮らし良いということは、文化的なものに対しての満足が得られるということを含めたものだと思うのです。

山崎　いま、若い人たちにとって東京というのは、何かある価値のシンボルなのですね。ですから、それに似たもの、それと同等の満足を与えてくれるものが手近にあれば、だれもが東京、東京とはいわなくなるのではないかと思います。

大臣　ですから私は、将来、都会地域に人口が七割住むのだといいましても、これはその都会地域のそれぞれのコミュニティの中が、いろいろな文化的な欲求にそえるような状態になっていなければいけない、そういう都会でなければいけないと思うのです。

山崎　それが、田園都市といわれているものだと解釈しております。

大臣　都市の再開発も入っているわけですね。私は、大都市の中に、いまの大都市にはない形のものがなければいけないと思いますね。一時間半も二時間もかけなければ、東京の文化に接することが出来ないところに下宿したり、家を持っていたのでは、なんのことはない、職場と家との間を往復するだけでエネルギーを費やしてしまう。それが都会生活であったとしても、文化的なものとは逆に縁が遠くなる。それを結び合わせること、地方の時代とはそうなければいけないのではないかと思うのです。

それにしても、地方から見ていると、どうしても東京の文化がよいというのですが、どうしたらそれに接近できるかということを考えますね。

山崎　私も大臣と同じ京都の出身ですが、京都にいますと、比較的古い文化も新しい文化も両方あり、東京を見てもあまりうらやましくありません。しかし、ずっと離れた県の人たちは、かなり国際的な文化に飢えていることは事実なんですね。それを満たしてあげることは、これから国土を全面的に使うという意味合いでも、非常に大事なことであると思います。

大臣　広い意味での文化に対する欲求、これに適切にこたえていくのが文教行政のこれからの課題だと思います。私もこれに向けてしっかり努力していきたいと思います。

編集後記

▽あけましておめでとうございます。本年も引き続き文部時報をご愛読賜りますよう、編集部一同お願い申し上げます。

▽ところで、「一年の計は元旦にあり」と申します。読者の皆様は、年頭に当たって、どのような計画を立てられましたでしょうか……。

▽今月号は、八〇年代の最初の年の年頭にふさわしく、我が国の将来を展望して「これからの教育」の特集を組みました。新春対談では、谷垣文部大臣にご出席いただいて、山崎先生と我が国の教育・文化について、将来の進むべき方向を語っていただきました。高村、飯島両先生には、それぞれ大所高所から、今後の我が国の教育の進むべき基本的な方向を示唆していただきましたし、天野先生には、高等教育の課題を中心に、教育の国際的動向についてまとめていただきました。

▽また、各界の有識者の方々に、二十一世紀を見通して、我が国の教育を展望していただき、麻生先生にそれを総括していただきましたが、いずれも、今後の教育の課題とその解決の糸口を考える際の重要な指標になるものと確信します。

▽来月は、「中国との教育・学術・文化交流」を特集します。

MEJ 61 月刊 「文部時報」 1月号 第1232号

著作権所有 文部省 昭和55年1月5日 印刷 昭和55年1月10日 発行

発行所 株式会社ぎょうせい
本社 東京都中央区銀座7丁目4番12号 (郵便番号 104)
(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地 (郵便番号 162)
電話 東京(268)2141(代表)
振替口座 東京9—161番
印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定価 200円 (〒33円)
年間購読料 2400円 (〒共)
* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます
* なお、購読の申し込みは、直接営業所またはもよりの書店にお願いします